



2017年度インターンシップ参加の学生たち。中央は矢嶋広報室長

業界への就職意欲高まるインター・ンシッブ
产学連携型の取り組みに学生・企業も評価

JATA広報室では、会員企業と合同で「JATAインターインシップ」を実施しています。今年2月に行われたJATAインターインシップでは、9日間にわたって実施されたプログラムに19大学から44人が参加し、25社が就業体験の学生を受け入れました。終了後、4月から5月にかけて行われた受講者アンケートによると、インターインシップ前に比べて旅行業に就職したい意欲が高まったほか、産学連携型インターインシップを必要と認識する比率が80%を超えるなど、高い評価を受けています。参加学生と受入企業の担当者、大学の指導教員に聞いた生の声を通じて、JATAインターインシップの成果や今後の期待などを紹介します。

「社会人基礎力」の重要性に気付く機会

今回のJATAINターンシップに学生を送り出した獨協大学外国語学部文化交流

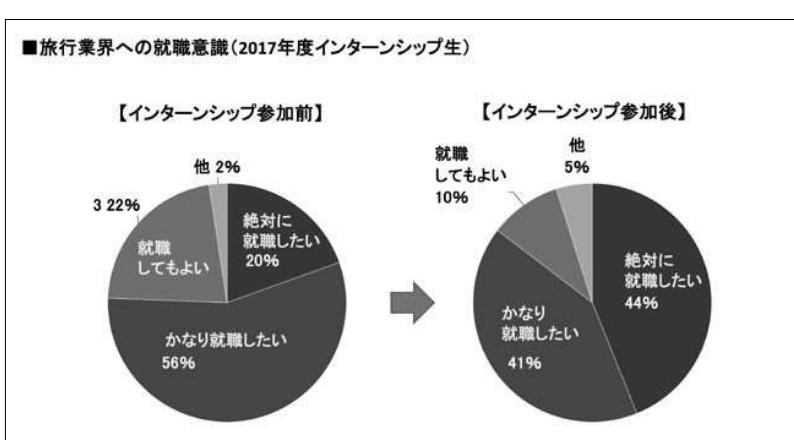
義のある取り組み」と指摘。大学3年生の2月というタイミングで実施されているJATAインターナシップは「就職活動への意識を高める意味でも重要な機会になっています」という見方を示しています。

あると同時に、実際に希望する業界の仕事にふれる)を通じて日常の学習活動に対して目的意識を高める動機付けとなる「意義のある取り組み」と指摘。大学3年生の2月というタイミングで実施されているJATAインターンシップは就職活動への意識を高める意味でも重要な機会になっています。

学科の鈴木涼太郎准教授は、学生自身が業界への適正について考える貴重な機会であると同時に、実際に希望する業界の仕事

大学という教育の現場で、学生と日常的に接している鈴木准教授は、「学生自身が興味を持つ業界の仕事にふれることで、普段の大学生活で自分が何をしなければならないのか、また、社会に出ていくうえで自分に何が足りないのかを気付いてほしい」とも語っています。小手先の就活テクニックや資格取得のための勉強、業界知識といった狭義の実務的な学びだけにとどまることなく、社会で必要とされるより総合的な力を、大学での学習・研究活動でいかに磨いていく

多様な業態が存在することへの理解も



のかといふことに「意識的になつてもらいたい」という鈴木准教授の期待は、教育的な

「……と、店舗カウンターでの接客というイメージが強かつたものの、顔が見えない状態でお客様にふれる現場があることを知り、一言で旅行会社と言つても、本当に多種多様な仕事の集合体として成り立っている現実を目の当たりにして、非常に興味深かった」と述懐しています。

2017年度JATAインターンシップ開催



受け入れ企業の研修に参加した学生たち

体にとっても重要な部分と考えている」(三井課長)を持つ学生だけが参加してくるJATAインターンシップの存在は貴重だ」と指摘。同社の場合、ホールセール事業や団体事業だけにとどまらず、業務渡航という特色のある事業が柱となっている中で、「業務渡航にはほとんど知識のない状態の学生を受け入れることにより、インターンシップ体験を通じて、より広く深く旅行業界に興味を持つてもらえるようになれば」と期待を示しています。「一般的には、カウンターや商品企画といったイメージが強い中で、インターンシップに参加する学生の思い込みを覆し、業務渡航など全く知らない世界を知つてもらいたい。そうした生身の情報を参加学生が周囲の学生にも話したりすることによって、知名度もブランド力も低い会社の特徴的な業務や事業への理解が広がっていくのは、業界全体に参加する学生の思い込みを覆し、業務

はほとんどの知識のない状態の学生を受け入れることにより、インターンシップ体験を通じて、より広く深く旅行業界に興味を持つてもらえるようになれば」と期待を示しています。「一般的には、カウンターや商品企画といったイメージが強い中で、インターンシップには大学側で意欲の高い学生を選抜して参加させており、鈴木准教授は「何よりも旅行業界への就職という結果」が一番の成果と考えている」と説明。同大学の場合、このインターンシップに参加した学生全員が旅行業界へ進んでおり、「半数の学生が第一志望の企業から内定をもらっている」と言います。学生たちはインターンシップでの経験が役立ったことを異口同音に鈴木准教授に伝えており、就業体験だけでなく、同じように旅行業界を志望する他大学の学生と一緒に行うプログラムを通じて、良い緊張感を伴つてインターンシップを体験していることを評価する学生も少なくないようです。

JTBの町田さんも、「就職の第一志望として旅行会社を目指す学生の仲間と濃密な一週間を過ごしたことは、ライバルの存在を知ったという意味でも大きな刺激になった」と振り返り、「JTBの同期にもJATAインターンシップに参加した仲間がいるなど、自分と同じように観光を学んできた人たちと親しい関係を構築できたことも、インターンシップに参加して良かったと感じて

旅行業界を目指す学生の連帯感も醸成

獨協大学の鈴木准教授によると、就職活動直前という時期に行われるJATAインターンシップには大学側で意欲の高い学生を選抜して参加させており、鈴木准教授は「何よりも旅行業界への就職という結果」が一番の成果と考えている」と説明。同大学の場合、このインターンシップに参加した学生全員が旅行業界へ進んでおり、「半数の学生が第一志望の企業から内定をもらっている」と言います。学生たちはインターンシップでの経験が役立ったことを異口同音に鈴木准教授に伝えており、就業体験だけでなく、同じように旅行業界を志望する他大学の学生と一緒に行うプログラムを通じて、良い緊張感を伴つてインターンシップを体験していることを評価する学生も少なくないようです。



事前学習 2日、事後学習 1日は座学で実施

大学と企業を結び付ける無二の役割

JATAのインターンシップに受け入れ企業として旅行会社を目指す学生の仲間と濃密な一週間を過ごしたことは、ライバルの存在を知ったという意味でも大きな刺激になった」と振り返り、「JTBの同期にもJATAインターンシップに参加した仲間がいるなど、自分と同じように観光を学んできた人たちと親しい関係を構築できたことも、インターンシップに参加して良かったと感じて

す中で、沖縄ツーリストにも興味を持つていただき、実際に入社試験を受けていただくケースもあり、非常に良いマッチングの機会にもなっている」と説明。また、「沖縄ツーリストの社名が沖縄以外の首都圏や他の地域では、必ずしも十分な知名度を得るまでにはいたっていない中で、沖縄の旅行会社として、ニユージーランドにレンタカーの事業所を開設したり、銚子電鉄の駅でネーミングライツの展開を行つたり、北海道でも旅行会社を展開したり、様々な取り組みを行つていて、地方の旅行会社や中小の旅行会社が地域経済に貢献しつづローバルな展開も行つてることへの理解を深めてもらいうといふ意味でも、JATAインターンシップは重要な役割を果たす」と話しています。

獨協大学の鈴木准教授は、より多くの業体験を行つてることから、「自分が現場を経験した2社以外の会社で、どのようなプログラムが行われ、仲間たちがどんな感想や成果を持ち帰つたかについても、もつと情報共有を深めたかった」とも語っています。

獨協大学の鈴木准教授は、より多くの業態や規模の旅行会社が学生を受け入れてくれる」とへの期待を示す一方、「旅行業の特性により就業体験の学生に任せられる業務が限定的なのは理解できるが、工夫次第で学生にとって有意義なプログラムを組むことは可能ではないかと思う」と指摘。「旅行業界の将来を担う優秀な学生を育成し、旅行業界に就職してもらう」という意味では、JATAインターンシップは意義のある取り組みであり、業界団体であるJATAによるインターンシップは、大学と企業を結び付けるという面で、他にはない役割を果たしうるのではないか」と大きな期待を示しています。